

九州芸工大生のアジア度を計る : 楽器音響学の授業から

吉川, 茂
九州大学大学院芸術工学研究院音響部門

<https://doi.org/10.15017/2928818>

出版情報 : 芸術工学研究. 1, pp.77-92, 2004-03-12. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン :
権利関係 :

九州芸工大生のアジア度を計る

— 楽器音響学の授業から

Measuring the "Degree of Asia" of the KID Students

— From the Class of "Acoustics of Musical Instruments"

吉川茂

YOSHIKAWA Shigeru

The objective of this report is to evaluate how correctly the KID students understand the Asia (defined as the "degree of Asia") from traditional music and musical instruments. More specifically, stringed instruments of China, Korea, and Japan are taken up: The pipa (biwa) and guzheng (larger koto) of China; the kayagum (smaller koto) of Korea; the biwa of Japan. The students are asked to answer the country and the musical instrument when the music is reproduced for about one minute from the CD in the class of "Acoustics of Musical Instruments" and other related subjects. Such answer data are accumulated from 1998 to 2003 just prior to the unification with Kyushu University. Also, the data from an open class for the public held at Ohmuta Industrial High School in 1999 are considered for the comparison. The "degree of Asia" of KID students is affected by the combination of country and musical instrument: About 10 % concerning Chinese biwa; about 20 % concerning Japanese biwa; about 40 % concerning Chinese koto; below 5 % concerning Korean koto. The biwa seems to have been losing the popularity in KID students compared with the open-class students. Japanese music tends to be mixed with Chinese music more easily in KID students than in open-class students, and the Japanese biwa is very often confused with the shamisen. Non-answering students are greatly increased in 2002 and 2003 FYs, and this seems to suggest their indifference toward traditional music. The degree of Asia has not been improved in the class of "Acoustics of Musical Instruments" which is held two and a half years later than "Introduction to Acoustic Design" for new students except for the Chinese koto music. This implies that almost no students of the Department of Acoustic Design tried to consciously listen to Asian music during this period. The most serious problem is the attitude to Korean music. Although Korean students can make a right answer readily to their own music, our Japanese students cannot do that to our music and do not know Korean music at all. The urgent item on the agenda is to build a common ground to share Korean music and Japanese music with each other through various creative ways.

1. はじめに

「福岡はアジアへの玄関」とか「福岡ではアジアの風を敏感に感じ取れる」などとよく言われる。そのような立地条件を活かすべく芸工大の将来計画や自己点検・評価報告などにも「アジア」が頻出する。また、韓国や中国の大学との国際交流も積極的に推進されてきた。このような傾向に筆者は敢えて異を唱えようとするつもりはないが、その実態の一端を少しでも客観的なデータに基づいて検討したいと思ってきた。特に、大学の教員や事務官に関するデータではなく、大学の将来を担う学生達の意識に関するデータが欲しい。「日本はアジアの一員である」という意識が現代の学生に果たしてあるだろうかという素朴な疑問がある。その意識があるとして、その強さや確かさはどの程度のものであるだろうか。また、彼らにとって「アジア」とはどれ程の空間的広がりとして捉えられているのか。その広がり意識は物の見方（地理的、政治的、音楽的などの観点）によっても変わってくるように思われる。

ところで、楽器は民族の特徴を如実に反映している。これは、ちょうどそれぞれの民族がそれぞれの言語をもっているのと似ている。音と音楽に対する感性が楽器の中には深く染み込んでいる。しかも楽器は社会的な存在でもあり、長い時間スケールで眺めると、各時代の社会の有り様を正確に映し出している。西洋の歴史を古代、中世、近代、現代と大別すると、社会と楽器の特徴は合い呼応している [1-5]。例えば、中世社会は神を基準にして聖と俗の階級に分かれており、楽器も聖

なる楽器と俗なる楽器に分かれたり、オーの（甲高く大きな音のする）楽器とバの（低くて静かな音のする）楽器に分かれたりしている [6]。アジアの各国にも特徴的な楽器があり、それらは社会とともに変化してきている [7-9]。

このような観点から筆者は音響設計学科における「楽器音響学」（3年・後期）の授業の第1回目と第2回目のテーマを「社会的存在としての楽器」と「楽器の中に民族の特徴を見る」に設定している。この授業のメインテーマは楽器の発音メカニズムに関する物理的説明であり、楽器の中には音響学の基本的な原理が豊富に含まれていることを学生に認識させたいからである。しかし、楽器は物理的な研究の対象として留まるだけの存在ではなく、より本質的には人々に芸術的な感動を与えるものである。一言でいえば、楽器はまさしく芸術工学的な研究対象である。筆者の力量不足のため、芸術工学的な楽器音響学の授業を展開するに至っていないが、そのような方向性を授業の始めでは示唆したいと考えている。

第1回目の「社会的存在としての楽器」では、前述したように西洋の歴史と西洋の楽器を極めて粗いスケールで俯瞰したり、ピアノの発明から現代までの変遷にスポットを当てたり、さらにもっと細かい時間スケールをとって、ピアノの発明前後にフォーカスしたりしている [10]。また、ヨーロッパの音楽・楽器とアジアの音楽・楽器との相違を述べたり、地理的な意味でのアジアと音楽的な意味でのアジアとの相違を指摘したりしている [11]。第2回目の「楽器の中に民族の特徴を見る」では、まずアジアやアフリカの楽器には打楽器が豊富であることを示し、「打楽器オーケストラ」とも言えるインドネシアのガムランの楽器を紹介している。その後で、アジアの弦楽器の独奏によるCDを聴かせ、その音楽の国名と楽器名を当てさせるクイズをしている。本稿の目的は、このクイズを分析することによって学生達のアジアについての意識、いかなれば「アジア度」を計測することである。

このようなクイズは3年生の「楽器音響学」だけでなく、1年生の「音響設計学概説」でも、筆者が芸工大に着任した1998年度の授業から実施している。また、2000年度には「芸術工学入門」で全学の1年生に対して行ない、1999年度には大牟田工業高校での一般公開講座でも社会人や学生に対して行なったので、若干の比較分析も可能である。これらの授業および公開講座

は1回限り（90分）であり、「楽器音響学」のダイジェスト版である。

2. CDクイズの内容

CDクイズは上述したような概括的な知識を与えた後に行なっている。アジアの音楽では打楽器が豊富であるが、その特徴を国別に言い当てることは難しいと思われるので、「アジアの弦楽器」について出題している。出題数は4つである。解答用紙には国名と楽器名の他、その解答の根拠とした事柄や感じられた特徴や印象を書き込む欄を設けてある。アジア度といっても、アジア全体を考察対象にするのは妥当ではないので、日本と日本に最も近い隣国である韓国と中国を対象を絞った。ただし、そのことを受講生には伝えなくてクイズを行なっている。したがって、学生はCDの音楽からアジアの中のどこかの国と何らかの弦楽器をイメージしている。

クイズでは4つの曲をそれぞれ1分前後聴かせている。教室は「芸術工学入門」と学外での公開講座を除いて、3号館321教室、322教室であり、音響再生装置の性能はすべての場合において十分に良好であった。筆者が用意している解答を表1に示す。これらの曲はそれぞれの国において「伝統的な音楽」であり、演奏者も一流である。CDのタイトルについても表1を参照されたい。

なお、1年生に対する「音響設計学概説」と「芸術工学入門」の授業では解答を示さないことにしている。3年生での「楽器音響学」で再度同一のクイズを出題し、学生の変化を見たいと思ったからである。

楽器の構造や演奏法はそれぞれの国での音楽の有り様と呼応している。したがって、CDからの音楽を聴いて、フレットのあるなし、楽器の大きさ、弦を何で（指先か義爪かバチか）撥いているかなどを正しく想像できれば、楽器音響学的には優れたセンスをもっていると言えよう。

3. データ分析

3.1 データ集計の考え方

1998年前学期から2003年後学期までに集計されたデータを棒グラフの形にまとめてみた。音楽から国名を当ててもらうことが第一義的に重要なので、国別にデータをまとめた。とりわけ、日中韓の違いの聞き分けを重視したので、棒グラフの最初は正解の国（図1の

表 1: クイズの正答とその根拠および CD のタイトル

CD	国名	楽器名	判断の根拠・感想	CD タイトル
# 1	中国 曲名： 「十面埋伏」	琵琶	<ul style="list-style-type: none"> ・漢民族ほど緻密な音の配列を好む民族はない。 ・幾何学模様のようなフレーズ。叙景的。 ・細やかな音の変化，速いリズム，多音。 ・4 弦，多くのフレット，指（またはピック）で弾く。 	中国一流民楽演奏家 CELEBRITY MUSIC CMCD9250
# 2	日本 曲名： 「敦盛」	琵琶	<ul style="list-style-type: none"> ・一音一音に思いを込める，打音的，さわり音。 ・間の音楽，叙情的。 ・4 弦（5 弦），フレット，大きな撥（バチ）。 	JAPON Ocora Radio France C580059
# 3	韓国 曲名： 「散調」 サンジョ	カヤグム 伽耶琴 (新羅琴)	<ul style="list-style-type: none"> ・強烈な音の揺れ（ユリ）。旋律表現の自由度が高い。 ・非等拍的なリズム（長短チャダンと呼ばれる型）。 ・12 弦，素手で弾く，膝の上のにせる，絹糸。 	伽耶琴・散調 KING RECORD KICC5144
# 4	中国 曲名： 「梅花三弄」	琴 (古箏)	<ul style="list-style-type: none"> ・21 弦（30 年前から）← 16, 15, 13, 12 弦 ・現在はペダル付の 25, 26 弦も開発された。 ・義爪（右手の親，人差，中，薬指），イス，絹糸。 （比較）日本の琴は 13 弦， 右手の親，人差，中指に義爪，タタミ座奏，絹糸。 	淡麗なる中国古箏 JVC VICG60027

1 では中国)に関するデータとし，2，3 番目の棒グラフは日中韓のうち正解でない国の 2 国を得票の多い順(図 1 の # 1 では日本，韓国の順)に並べた。また，データはパーセント表示などを用いず，得票数の実数を示すことにした。ほとんどすべてのケースで，楽器名に関する未回答数が国名に関する未回答数を上回っており，音楽から楽器名だけを独立に聞き取っているような聴き方はしていないと推測されるので，楽器名に関するデータは国名の棒グラフの中に表した。

3.2 「楽器音響学」の授業から得たデータの分析

図 1 に「楽器音響学」(3 年後期)の授業における集計結果を示す。年度を行に，クイズ番号を列に並べた。クイズ番号を固定して年度順に見ると，次のように言えよう。

- (1) クイズ # 1 の正答は中国であるが，これを日本と答える学生が正答の学生とほぼ同数いる。6 年間の総計すると，中国と答えた学生数 30 に対して，日本と答えた学生数は 33 であり，正答数を上回っている。また，1999 年度では中国と答えた正答数が一番多かったが，2001 年度では日本と誤答した学生数が正答の学生数の 2 倍いる。最近の学生ほど，# 1 については日中の区別がつかなくなっているという傾向を見ることができよう。この # 1 の楽器は琵琶(ピーバ)であるが，正答した学生はこの 6 年間を通じてたった 3 名であり，2000 年度の学生は韓国からの留学生であり，彼は # 1, # 3, # 4 のクイズでも

国名，楽器名ともに正答であった。他の 2 名は 2003 年度の学生で，それぞれ「"女子十二楽坊"の CD で聴いた感じに似ている」，「速弾きしている」とのコメントがあった。

中国と答えた学生の 80 % 以上は楽器名については未回答であった。この結果は芸工大音響設計学科の学生は中国の琵琶という楽器をほとんど知らない(その音を聞いたことがない)ことを明示している。また，日本と誤答した学生のうち 79 % が三味線あるいは三線と誤答しており，中国の琵琶(フレットがあり，バチは使わない)と日本の三味線(フレットはなく，バチを使う)とを区別できていない。中国の琵琶はバチを使わないので，そのトレモロ的な演奏からマンドリンやギターを連想する学生もいる。

- (2) # 2 の正答は日本であり，2002 年度を受講生を除いて，ほぼ安心できる結果といえよう。特に，6 年間の学生総数 142 名のうち韓国と答えた学生は 5 名であり，日本の音楽と韓国の音楽の相違を音のイメージとして峻別していると思える。それに対して中国と答えた学生数は 9 名いるので，日中の混同は無視できない。また，インドと答えた学生の合計は 18 名もおり，未回答の学生数 27 名を加えると，正答者数の合計 49 名に近くなる。すなわち，日本の伝統音楽を日本のものと聞いている学生は一握り(35 % 未満)に過ぎない。楽器名を琵琶と正答した学生は日本と正

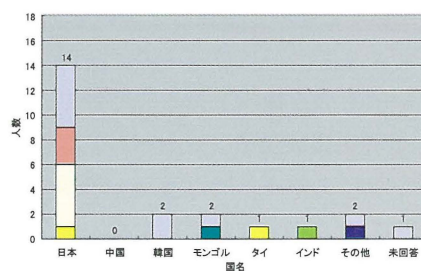
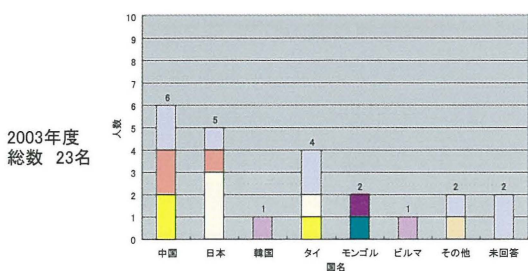
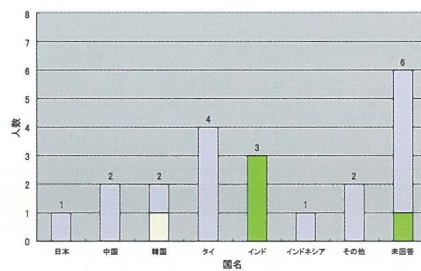
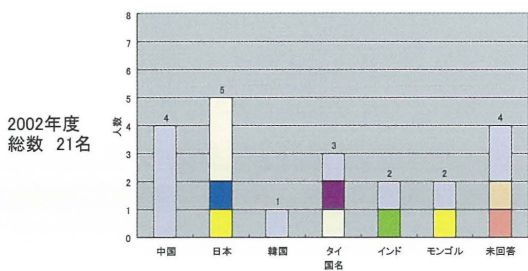
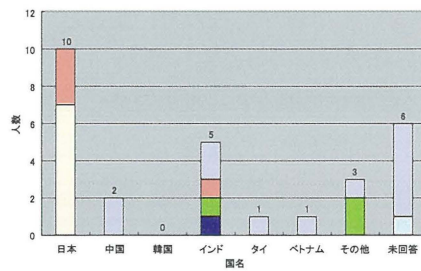
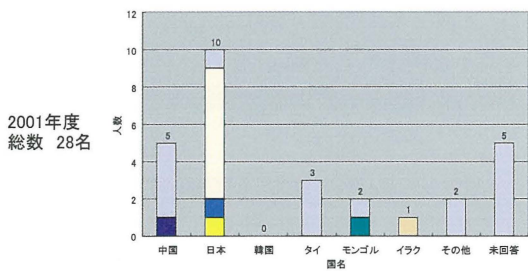
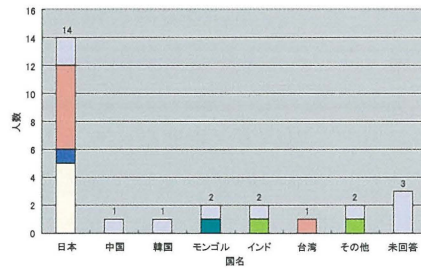
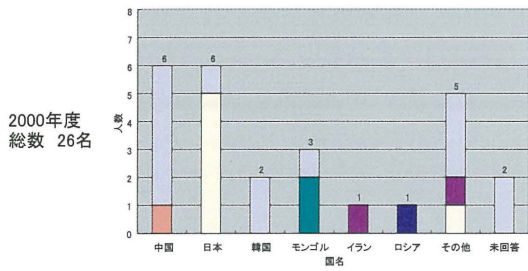
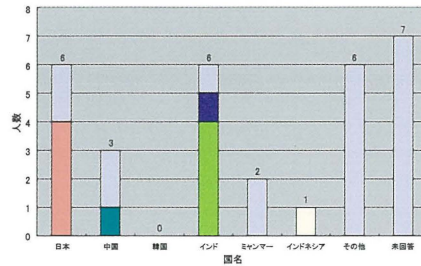
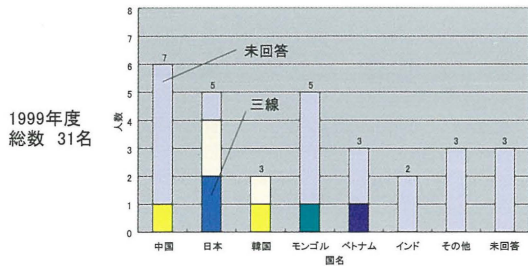
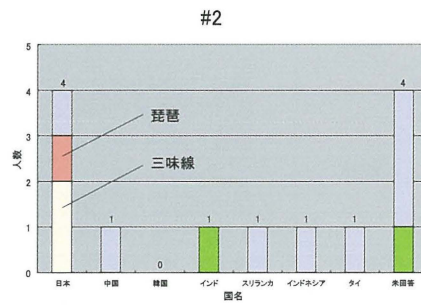
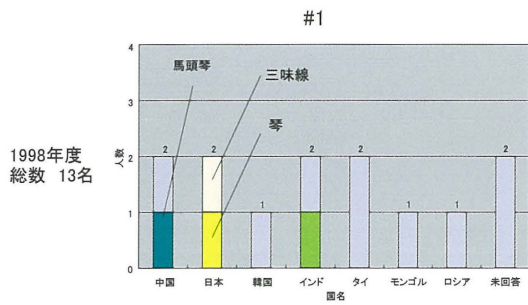
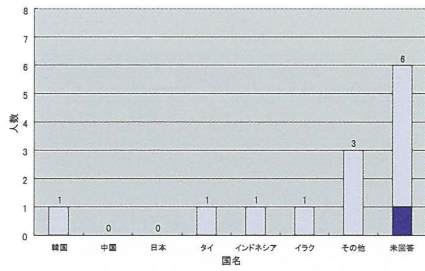
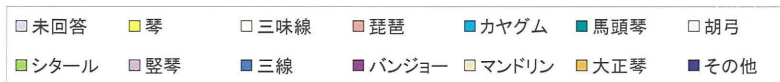
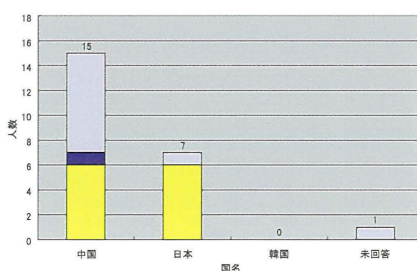
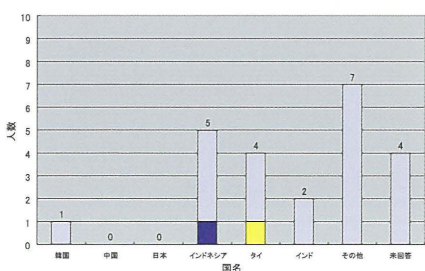
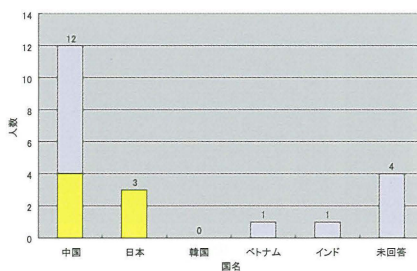
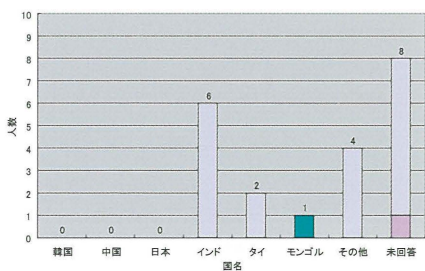
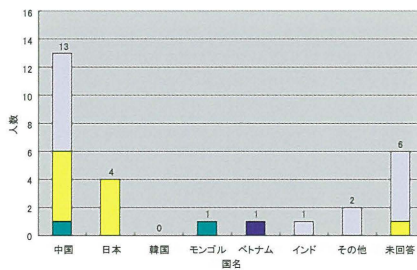
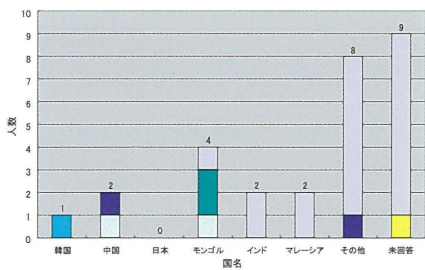
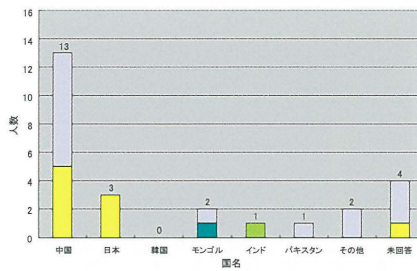
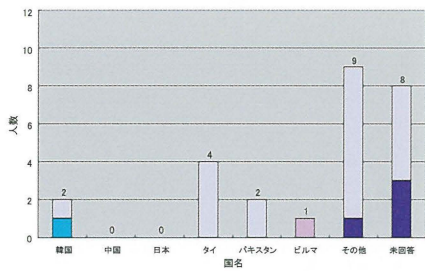
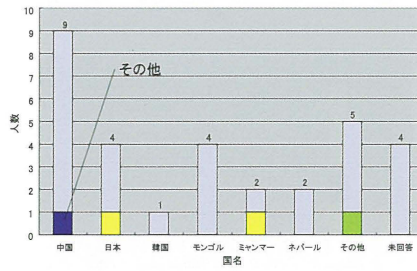
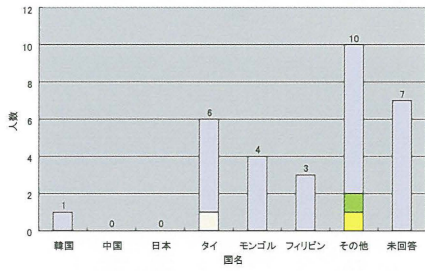
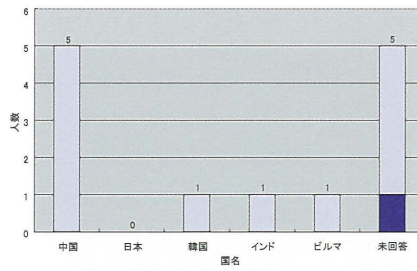


図 1: 「楽器音響学」の授業における集計結果

#3



#4



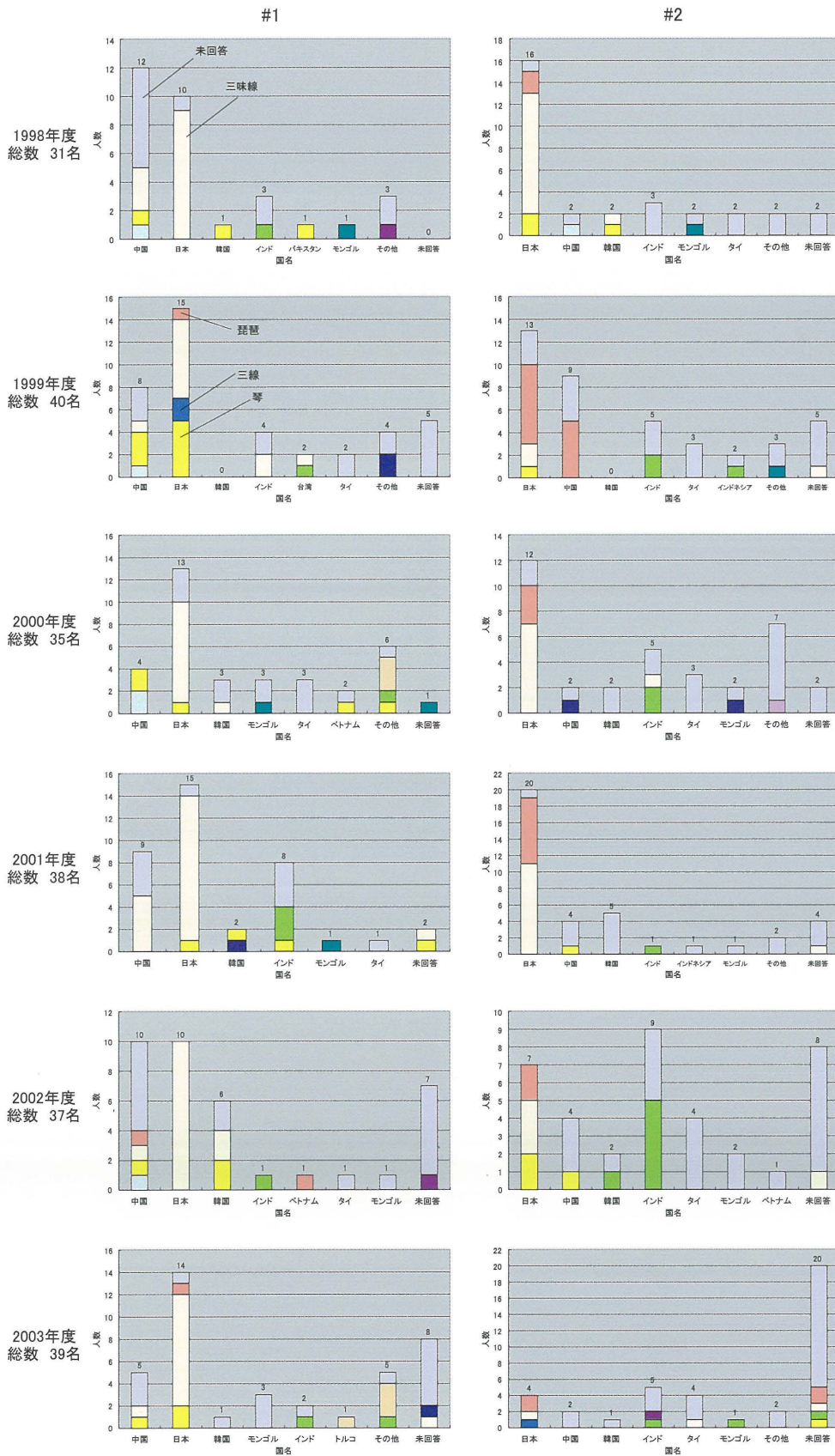
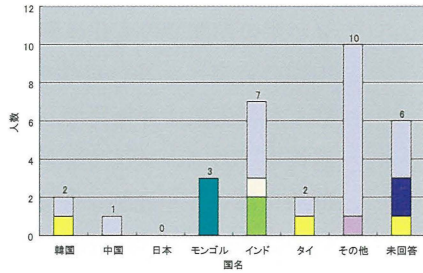
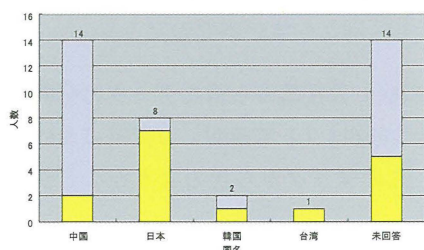
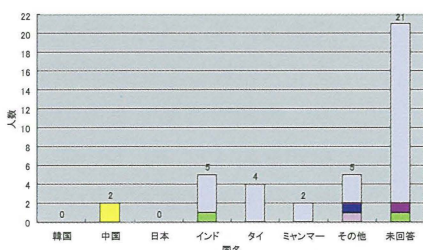
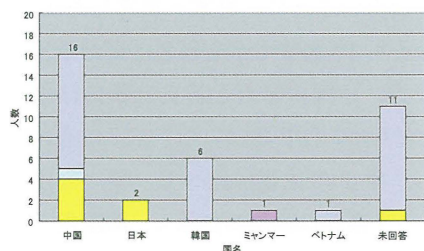
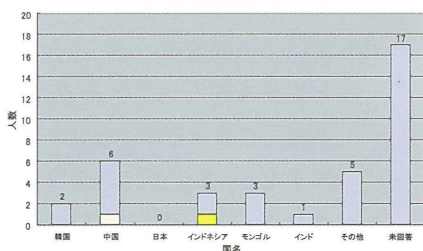
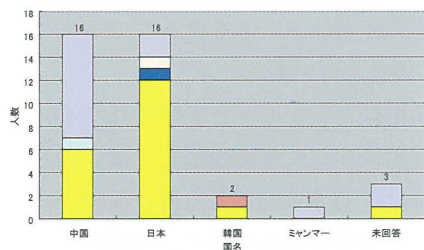
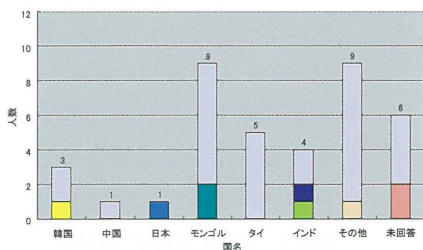
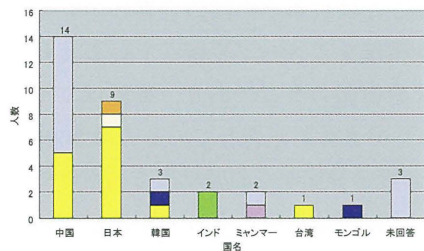
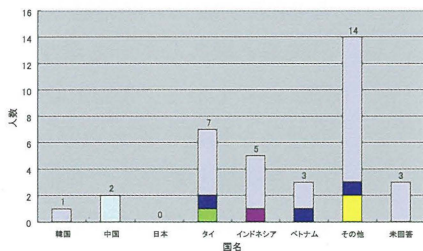
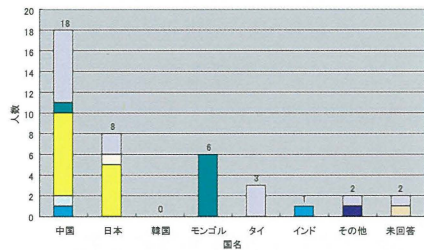
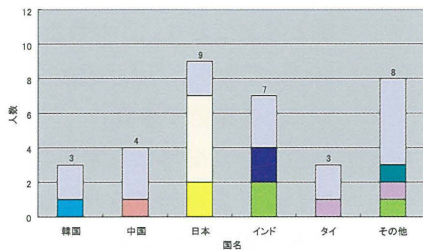
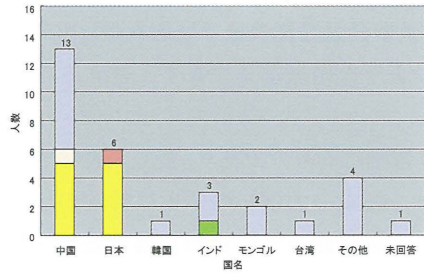


図 2: 「音響設計学概説」の授業における集計結果

#3



#4



- 未回答
- 琴
- 三味線
- 琵琶
- カヤグム
- 馬頭琴
- 胡弓
- シタール
- 竪琴
- 三線
- バンジョー
- マンドリン
- 大正琴
- その他

答した学生のうちの35%であり、39%の学生が三味線と誤答している。しかし、伝統音楽が失われ、琵琶という楽器が巷間には聞かれないこと（博多は筑前琵琶発祥の地ではあるが）を考えれば、このような結果はまずまずと言えるかも知れない。

(3) #3の成績は惨憺たるものであり、芸工大音響設計学科（多分、日本の大学）の学生は韓国の伝統的な音楽も楽器も知らないと言える。6年間の学生総数142名のうち韓国と正答した学生は6名（4%）であり、20%以上の学生がタイ、モンゴル、インドなどの音楽だと聞いている。30%の学生は未回答であり、どこの国の音楽であるか見当をつけられないでいる。ただし、6年間のデータでは日本と答えた学生は皆無であり、中国と答えた学生も2001年度の2名に過ぎない。このことは日本や中国の音楽について学生はかなり明確なイメージを持っていると言えよう。#3を韓国の音楽であり、楽器はカヤグム（伽耶琴）であると正答しているのは2000年度と2001年度の韓国からの留学生2名だけである。しかも、彼らは自信をもって正答している。2001年度の留学生は「奥深い音。演奏方法などで分かる」とのコメントを残している。このような日韓の差は何であろうか？

(4) この#4は学生にとってもっとも容易なクイズであったと言えよう。6年間の平均では、正答率は47%であり、日本と誤答した割合は15%、韓国と誤答した割合は極めて低く、人数にして2名である。面白いことに、日本と誤答した15%（21名）のうち17名までが楽器名は琴だと答えている。一方、中国の琴だと答えた学生は中国と正答した学生67名中20名（37%）に過ぎない。しかし、#1の琵琶に比べて、琴（厳密には古箏）という楽器は馴染みが深く、国際色をもっていると言えよう。中国の琴の音楽は日本の学生にとって区別しやすい例なのだろう。

3.3 「音響設計学概説」の授業から得たデータの分析

図2に「音響設計学概説」（1年前期）の授業における集計結果を示す。このデータから次のようなことが言えよう。

(1) クイズ#1で国名、楽器名ともに正答した学生

は6年間の総数220名中たった1名である。正答率で言えば、0.45%である。これは「楽器音響学」の授業での結果と同じである。すなわち、2年半の期間での変化は学生の間に見られない。中国の音楽と正答した学生数と日本の音楽と誤答した学生数は6年間で、48人対77人であり、誤答率（35%）の方が正答率（22%）よりも圧倒的に高い。年度別に見ると、正答率の方が高いのは最初の1998年度だけである。また、日本と誤答した学生のうち78%が三味線あるいは三線と答えており、この数値は「楽器音響学」では79%であり、芸工大生が琵琶について無知であることを確認できる。

(2) 琵琶という楽器は日本の音楽という状況の中ではかなり思い起こされるようであり、6年間で日本と正答した学生72名（正答率33%）のうち24名（33%）が琵琶と答えている。それでも三味線と誤答している学生の方が多くて、36名（50%）もいる。1999年度の学生は特異的で、楽器名を琵琶と答えた学生が12名（30%）おり、三味線と誤答した学生は2名（5%）に過ぎない。また、韓国と誤答した学生は6年間で12名（5.5%）に過ぎないが、インドと誤答した学生は28名（13%）いる。特に、2002年度の学生にインドと誤答した学生が多く、彼らの半数以上が楽器名をシタールと答えている。2002、2003年度の学生では未回答者が増えており、2003年度の20名はほぼ5倍の増加である。このような2002、2003年度の数値が意味するところは今のところ不明である。

(3) 韓国の伝統音楽は芸工大の学生にとってほとんど馴染みがないと言える。韓国の音楽あるいは楽器と正答する学生は毎年度2名前後であり、平均すると、5.0%に過ぎない。さらに、楽器名をカヤグムと正答した学生は6年間でたったの1名であり、それは1999年度の韓国からの留学生である。琴と答えた学生が他に2名いる。このクイズに対しても1999年度の学生は特異的であり、韓国の音楽を日本の音楽と間違えている学生が9名（23%）もいる。また、2002年度の学生のうち6名が中国の音楽と誤答している。このクイズでの音楽はインドの音楽ではないかと聞いている学生がもっとも多く、6年間で26名

(12%) いる。他には、韓国の音楽をタイやモンゴルの音楽と間違えている学生が無視できない数いる。クイズ# 2と同様に、未回答の学生が2002, 2003年度に多く、クイズ# 3では約半数に上る。

- (4) 中国の琴という音楽は1年生にとっても答えやすい問題のようである。特に、琴という楽器の音は多くの芸工大生がどこかで耳にしているようである。国別で、中国と正答した学生数は6年平均で、41%であり、日本と誤答した率は22%である。韓国と誤答した率は5.9%であり、このクイズでは日中韓の区別をつけている。楽器名については、中国と正答した学生総数のうち33%が琴と正答しており、日本と誤答した学生でも78%が琴と答えている。年度別に眺めると、2001年度の学生は日中の区別がついていないようである。また、クイズ# 2,3同様に、2002, 2003年度の学生では未回答者が激増している。

3.4 「芸術工学入門」の授業から得たデータの分析

図3に「芸術工学入門」(1年前期)の授業(2000年度のみ)における集計結果を示す。このデータのうち音響設計学科の学生に関する部分は図2に示してある。ここでは、各学科ごとのデータを示す余裕はないので、全学科をまとめて集計し、分析する。

- (1) クイズ# 1を正答の中国と答えず、日本と誤答する学生数が正答数の2倍以上いることはやはり驚きである。正答率は17%であり、日本と誤答した率は39%である。2000年度の音響設計学科の学生(図2参照)の正答率は11%、日本誤答率は37%であり、正答率は芸工大全体の方が高い。楽器名を琵琶と正答した学生は1名おり、音響設計学科の学生ではなく、工業設計学科の学生である。また、日本と誤答した学生のうち67%(音響設計学科だけでは69%)が楽器名を三味線と答えている。韓国の音楽と答えた学生は5.2%なので、日中の音楽と韓国の音楽とは別だと感じていると、このクイズに関しては言えそうである。しかし、モンゴルの音楽だと聞いている学生が15%おり、中国の音楽に対するイメージがあやふやなのではと危惧される。また、「中国の胡弓」、「モンゴルの馬頭琴」のよ

うに一つ覚え的な型にはまった回答もかなり多かった。ともかく、中国の琵琶の音楽を芸工大生は知らないと言える。

- (2) # 2を日本と正答する率は39%であり、中国および韓国と誤答する率(それぞれ4.1%, 5.2%)よりも圧倒的に高い。音響設計学科の正答率は34%であり、全体よりも低い。インドおよびモンゴルと誤答する学生がそれぞれ12%および9.3%おり、自国の音楽に対してもあやふやなイメージをもっている学生が相当数いる。日本と正答した学生のうち楽器名を琵琶と正答した学生は27%に過ぎず、57%の学生が三味線と答えている。琵琶という楽器が学生の世代にはポピュラーではなく、しかも彼らにとってはよりポピュラーだと思われる三味線もその楽器の特徴を正確に捉えて聞いてはいないことが分かる。
- (3) 韓国の音楽は芸工大の学生にとって実に難しい。単に聞いた経験がないということかも知れないが、# 3の正答率は7.3%に過ぎない。国名をインド、タイ、インドネシアと答える学生がそれぞれ13%, 12%, 10%いる。また、その他の国名を答える学生が33%もいる。中国と誤答する率は11%であり、韓国の音楽を中国の音楽と間違えている学生も1割いることになる。楽器名も難しく、韓国の琴と答えられた学生は1名(工業設計学科)に過ぎない。総じて、芸工大の学生は韓国の音楽、韓国のカヤグムという琴を聞いたことがないようである。音響設計学科の学生には日本と誤答している者はいないが、タイ、インドネシア、ベトナムと誤答している学生がかなりいる。楽器名についてはほとんどが未回答である。
- (4) 42%の学生が中国と正答している一方、26%の学生が日本と誤答している。韓国と誤答する学生は8.3%なので、この問題でも日中と韓国の音楽の違いは分かるようである。楽器名も琴と正答する学生が半数近くおり、特に日本と答えた学生のうち82%もの学生が琴と答えている。琴という楽器には芸工大の学生は馴染みがあるようである。

芸術工学入門
総数 193名

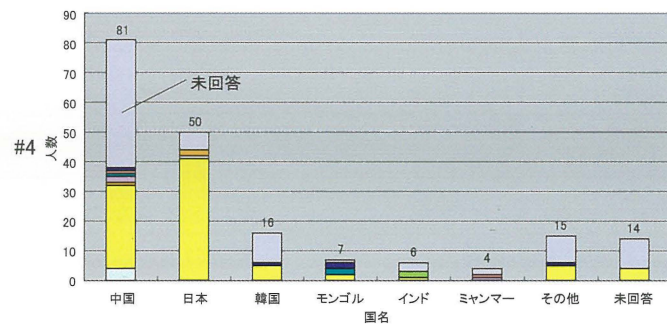
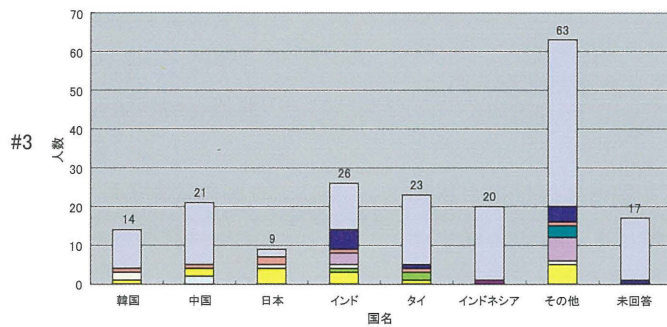
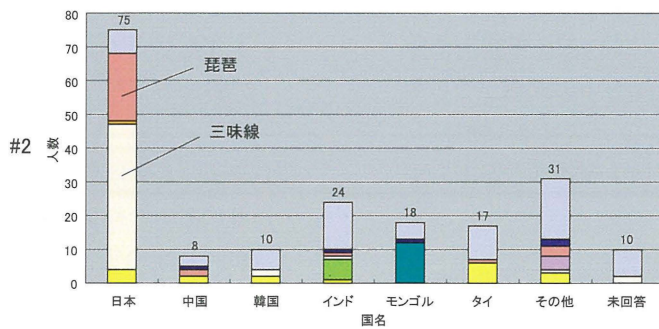
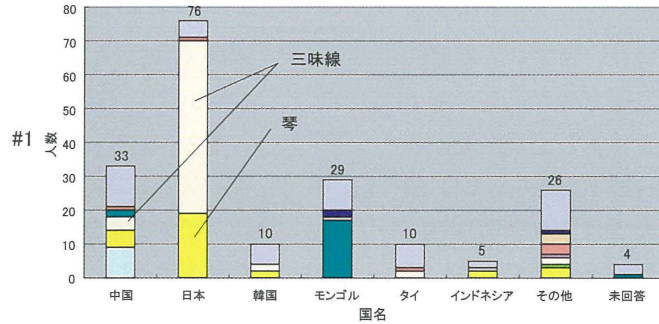


図3: 「芸術工学入門」の授業における集計結果

公開講座
総数 33名

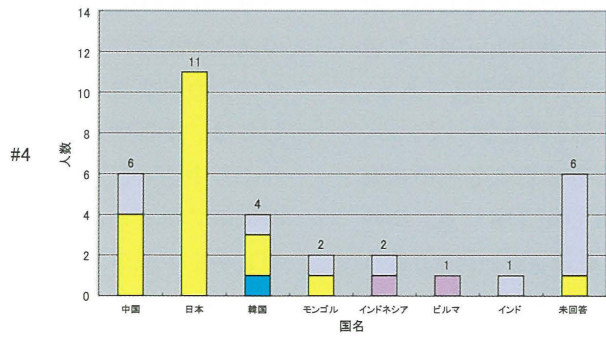
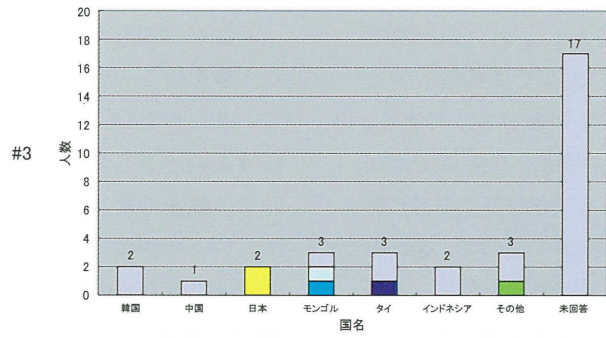
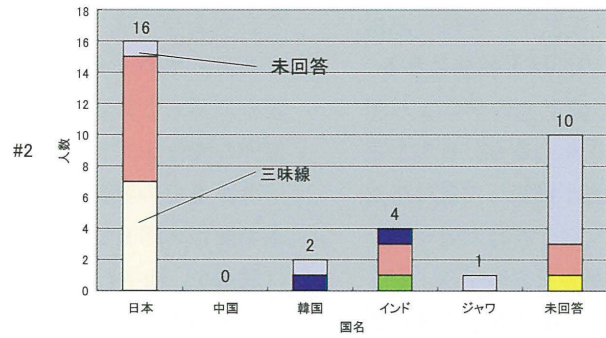
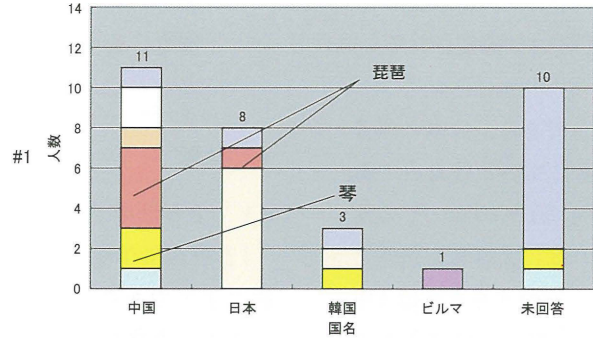


図 4: 「公開講座」における集計結果

3.5 市民向け公開講座から得たデータの分析

1999年度に大牟田工業高校で行なった市民講座から得たデータを分析し、その結果を図4に示す。総数は33名であり、平均年齢は調べていないが、高校生からその親の代までいたので、35歳くらいと推定される。

- (1) クイズ#1の正答率は33%である、日本と誤答した率(24%)よりも有意に高いと言えるであろう。ただし、未回答の者も30%いる。その他は、韓国、ビルマと答えている。楽器名を琵琶と正答している者が5名おり、そのうち4名は「中国の琵琶」と正答している。明らかに芸工大の学生とは異なる傾向を示しており、平均年齢以上の参加者に正答者がいるのではと推測される。
- (2) このクイズに対する成績も芸工大の学生より圧倒的に良い。未回答者が30%いるが、日本と正答した者は48%おり、中国と誤答した者は皆無である。韓国、インド、ジャワと答えた者がそれぞれ2名、4名、1名いるが芸工大の学生よりも割合は低い。楽器名に関しても日本と正答した者のうちちょうど半数の8名が琵琶と正答しており、7名が三味線と誤答し、1名は未回答である。市民講座の受講者にとっては琵琶という楽器が過去の遺物にはなっていないようである。ただし、琵琶と三味線の区別はそう簡単ではないのかも知れない。両者とも「さわり」の音に特徴があり、さわりの機構が相違するので、さわりの音にはそれぞれに固有の特徴があるが、その相違を聞き分けるには習練が必要であろう。
- (3) 韓国の音楽はやはり日本人にとって難しい。未回答が半数以上の17名いる。韓国と正答した者は2名いるが、楽器名については未回答である。日本と誤答した2名は楽器名を琴と答えている。奇妙なことに、モンゴルと答えた3名の中に楽器名をカヤグムと答えたものが1名いる。この韓国の伝統的な音楽である散調(サンジョ)は日本人にとってどこの国の音楽か想像し難いようであり、ましてや楽器名に至っては論外なのである。
- (4) 意外なことに、中国の音楽を日本の音楽と取り違えている者が倍近くいる。日本と誤答した者(33%)はすべて楽器名を琴(あるいは箏)と答

えており、琴にひかれて日本と答えた者もいるように思われる。韓国と答えた者も4名いるが、ここでも日中と韓国のとの間に音楽上の区別を受講者は置いており、日本人に共通した音楽の聴き方のようなのである。芸工大生は日中の間の区別も、もう少し正しくつけているようである。

4. 比較

4.1 2年間半での進歩はあるか

「音響設計学概説」と「楽器音響学」との授業期間は約2年半であり、前者を受講した学生が後者の授業でどのような変化を示すか興味がある。意識的にアジアの音楽を聴く学生が若干名でも増えれば、授業の甲斐はある。そのような若干名を3節で示したデータから読み取することは難しいであろうが、国名の正答率と誤答率の変化をグラフにしてみた(図5参照)。また、クイズ#2での楽器名の正答(琵琶)率と誤答(三味線)率の変化を図6に示す。なお、「楽器音響学」の授業には聴講生、他学科の学生、音響設計学科4年生などが混じっているが、少数であるため、ここでは彼らも含めて扱っている。

正答が増加して、誤答が減少することが望ましいので、●をつないだ実線の上側に●をつないだ破線がきて、▲をつないだ実線の下側に▲をつないだ破線がくればよい。さらに、正答率が誤答率より高い方がよいので、●をつないだ線が▲をつないだ線の上側にきてほしい。そのような望ましい傾向は図5の#4のクイズ結果に見られる。これは中国が正答のクイズであり、2002、2003年度の楽器音響学での成績はかなり良い。一方、日本が正答の#2では2002年度の楽器音響学での成績が極端に悪くなっている。誤答率も増加しており、この年度だけ特異な傾向を示している。#1に関しては、誤答率が低下して改善傾向は見られるが、それでも中国の音楽を日本の音楽と誤る学生の方が多いのは気になるところである。#3に関しては、正答率が2年半で減少する傾向にあり、その間に学生達が韓国の音楽に触れていないことを証している。また、未回答の学生が増加していることも気になるところである。総じて、2003年度の楽器音響学受講生の「アジア度」が高いようである。

図6からは、2001年度の楽器音響学受講生の成績が極端に悪化していることが分かる。すなわち、正答率

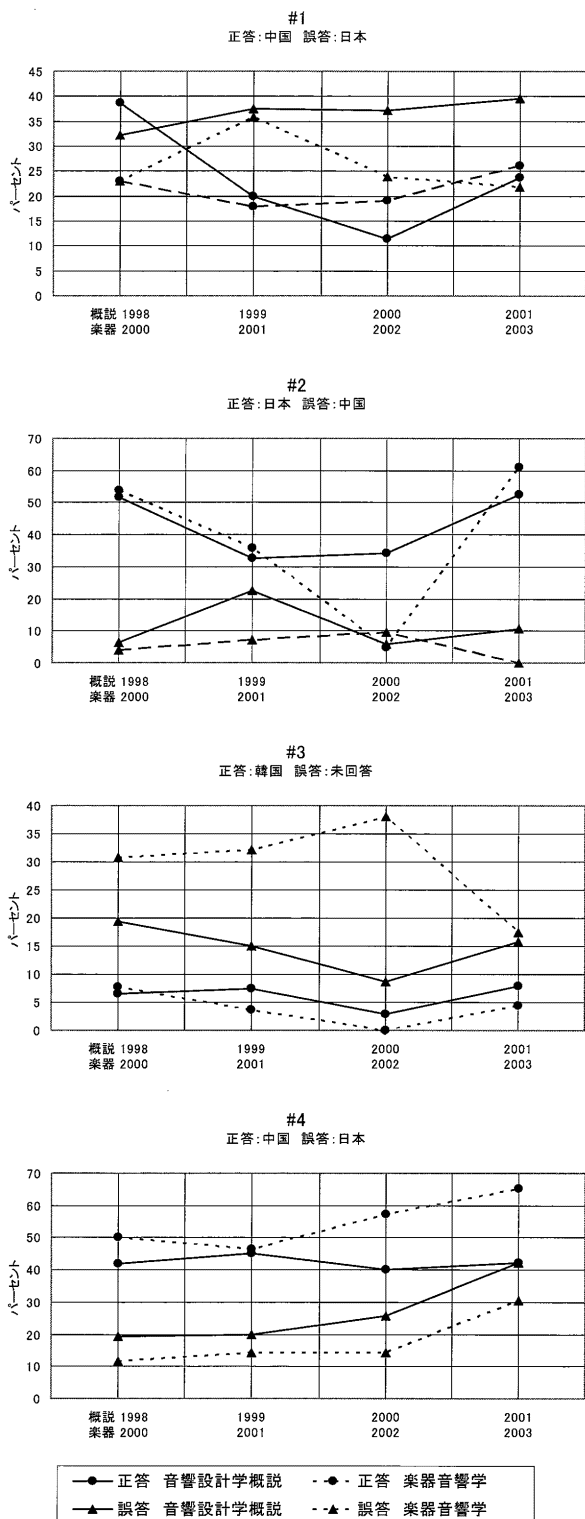


図 5: 国名の正答率と誤答率の変化

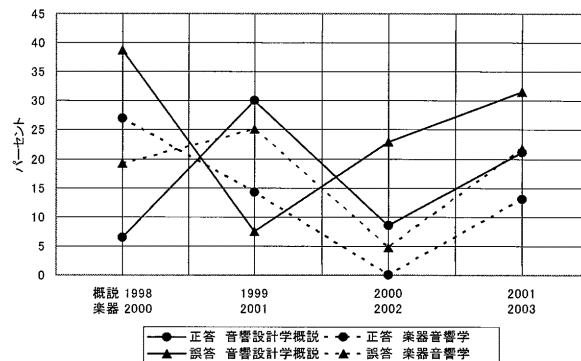


図 6: # 2 の楽器名に関する正答率と誤答率の変化

が半減し、誤答率が3倍以上になっている。ある程度望ましい傾向を示しているのは2000年度の楽器音響学だけである。楽器名に関しては、琵琶を三味線と間違える学生が非常に多い。これは、琵琶に馴染みがなく、音を知っていないということなのかも知れない。

4.2 音響設計学科の学生は異色か

次に、2000年度の芸術工学入門のデータに基づいて、音響設計学科の学生と他学科の学生とを比較してみよう。

図7に比較の結果を示す。図7(a)はクイズ番号を横軸に取り、国名の正答と誤答のパーセントを縦軸に表している。(b)では楽器名に関して同様の統計をとっており、ここでは国名の正誤は問題にしていな。 (c)では、国名を正答(あるいは誤答)した学生の中で、さらに楽器名も正答(あるいは誤答)した学生の割合を示している。各クイズの正答は表1の通りであり、誤答はクイズ#1から#4の順に、日本、三味線/中国、三味線/未回答、未回答/日本、三味線とした。

(a)より、これまで見てきたように、#2と#4のクイズに対しては正常な傾向(正答率が高く、誤答率が低い)を示しているが、#1と#3に関してはそれとは逆の傾向がみられ、正常ではない。特に、#3のクイズは正答率が極端に低く、異常な傾向を示している。正答率を見ると、音響設計学科の学生よりも他学科の学生の方がかなり高いと言える。誤答率に関しては、音響設計学科と他学科との間に差は見られない。

(b)では、正常な傾向を示すのはクイズ#4のみであり、琴(中国や日本の)には馴染みがあって、三味線の音とは峻別しているように思われる。一方、琵琶(中国や日本の)や韓国の琴(カヤグム)の音は滅多に耳にしていないことが分かる。特に、#3の楽器名については未回答者が非常に多い。ここでも、正答率を見ると、

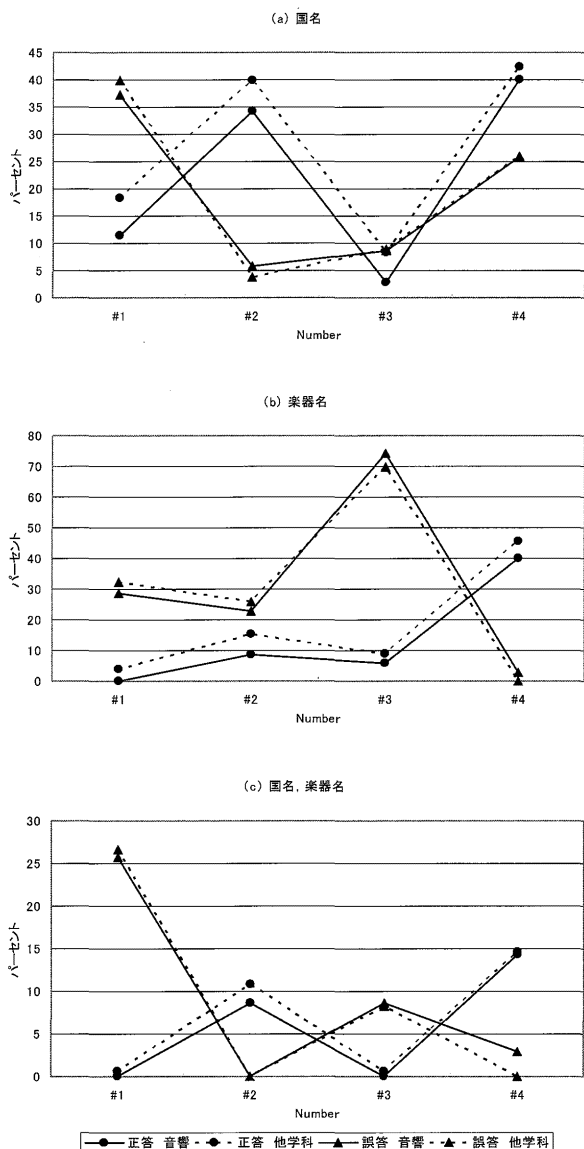


図7: 音響設計学科の学生と他学科の学生との正答率および誤答率に関する比較

他学科の方が音響設計学科よりも若干高い。

(c)の傾向は大まかには(a)の傾向と同じである。中国の琵琶を日本の三味線と混同する学生が多い(#1)一方で、中国の琴(古箏)を日本の三味線と間違える学生は少ない(#4)。この(c)では音響設計学科と他学科との差はほとんど見られなくなっている。

要するに、音響設計学科への入学生がアジアの音楽や楽器に関して特別に高い「アジア度」を示してはおらず、むしろ他学科への入学生の方が「アジア度」は若干高いと言えよう。

4.3 芸工大生の特徴は何か

最後に、2000年度の芸術工学入門のデータと1999年度の市民講座のデータを比較して芸工大生の特徴を

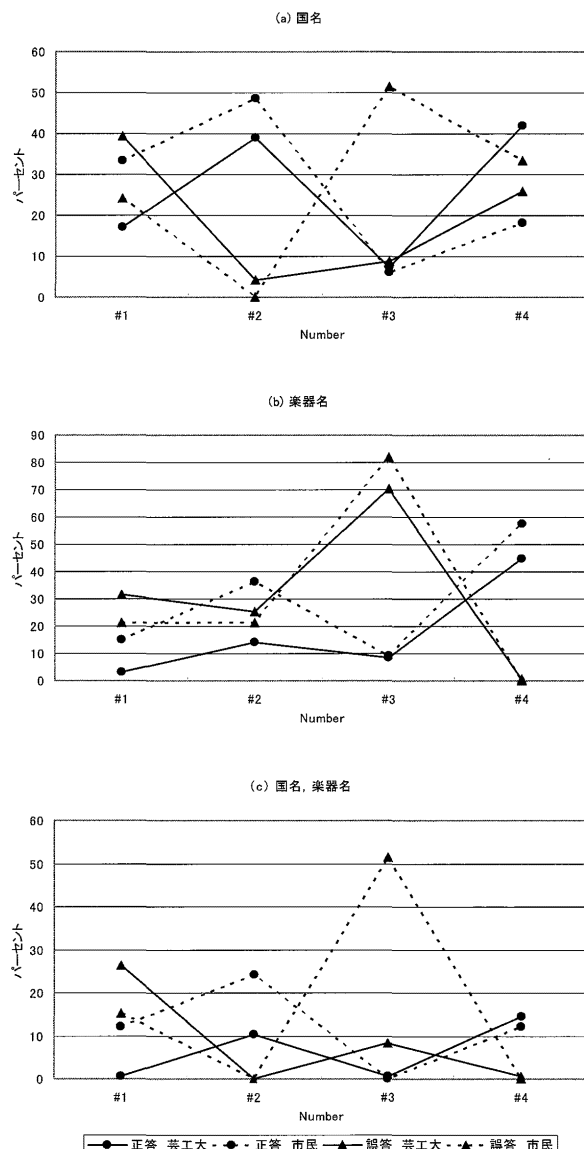


図8: 芸工大生と市民講座受講者との正答率および誤答率に関する比較

探ってみたい。

図8に両者の相違を図7と同じような分類に従って図示した。図7では音響設計学科への入学生と他学科への入学生の間には顕著な相違がないことが示された。すなわち、芸工大への入学生を一塊りの集団として捉えられると考えられる。この芸工大生の傾向と市民講座受講生(市民)の傾向との間にはかなりの相違があることが図8より分かる。それらをまとめると以下のようなだろう。

- (1) #1と#2での国名に関する正答率は市民の方がかなり高く、誤答率は市民の方が低い。同様のことは楽器名に関しても言える。すなわち、「中

国の琵琶」と「日本の琵琶」の音楽を市民の方が芸工大生よりも正確に聞いている。芸工大生は琵琶に弱いと言えるかも知れない。

- (2) # 3 では市民の 50 % 以上が国名および楽器名に関して未回答である。一方、芸工大生は (a) から分かるように、正答率は市民同様に低いが、何とか国名に対するイメージを提示しようとしている。そこに芸工大生の何らかの反応を見ることができよう。ただし、韓国の音楽は芸工大生にとっても市民にとっても馴染みがないようである。
- (3) # 4 に関しては、芸工大生は市民よりも倍以上の正答率で国名を当てている。楽器名 (琴) の正答率は芸工大生の方が若干低いが、(c) から分かるように、国名と楽器名を正答している率は芸工大の方が若干高い。こういったことは「中国の琴」の音楽は芸工大生にとって分かりやすい音楽なのだと見えよう。分かりやすい音楽とは西洋の音楽に近いということの意味しているとも言えよう。

5. まとめと私見

本稿は 6 年間という短い期間に得られたデータを基に分析したものであり、その点で不十分な比較検討しかできない。当初、10 年以上のデータ蓄積を経てからの執筆を目論んでいたが、平成 15 年度 10 月 1 日の九州大学と九州芸術工科大学との統合を機会に、統合前と後との比較にも興味湧いてきた。そこで、統合前の九州芸工大生の特色を音楽における「アジア度」といった観点から検討してみることにした。今後さらに 6 年間のデータを蓄積できれば、「アジア度の変化」について述べることができるであろう。それは九州芸術工科大学の学生気質と九州大学芸術工学部の学生気質との比較をある程度定量的に行う足場にもなるであろう。

芸工大生のアジア度を計る上での重要な傾向は以下のようにまとめられよう。

- (1) 「中国の琵琶 (ピーパ)」という楽器とその音楽を芸工大の学生 (音響設計学科, 他学科とも) はほとんど知らない。十分なアジア度を 100 % とすれば、この楽器に関する芸工大生のアジア度は 10 % 程度であろう。大学生以上の市民のアジア度は 20 % 以上あるのではないかと推測される。

(2) 「日本の琵琶」という楽器も芸工大生はあまり知らない。日本の音楽らしいと想像しているが、琵琶という楽器名は浮かんでこない。また、琵琶という楽器が入ってくると、日本と中国との混同が起こりやすく、琵琶を三味線と混同する学生がかなり多くなる。このクイズでのアジア度は 20 % 程度であろう。

(3) 一方、「中国の琴 (古箏)」という組み合わせでは、日中の区別が容易になり、琴と三味線との混同も起こりにくい。芸工大生のアジア度は 40 % 程度まで上昇する。

(4) しかし、「韓国の琴 (伽耶琴)」になると、国名を間違え、楽器名は未回答の学生が圧倒的に増加する。学生は韓国の音楽も楽器も耳にしたことがないと思われる。韓国からの留学生を除いた芸工大生のアジア度は 5 % 以下であろう。ただし、このことは市民にも言えることであり、日本人が韓国の音楽と楽器に無関心だということを示している。

(5) 韓国からの留学生の数は少ないが、彼らは韓国と中国の音楽、楽器を良く知っているように思われる。一方、日本の音楽と楽器はあまり知らない。

(6) 2002, 2003 年度の学生では、未回答者が激増しており、伝統的な音楽への無関心を示唆している。

(7) 「音響設計学概説」と「楽器音響学」との授業間隔の約 2 年半でのアジア度の改善は「中国の琴」という組み合わせ以外では見られない。この 2 年半で芸工大の音響設計学科学生が意識的にアジアの音楽を聴こうとしたことは皆無に近い。

(8) 音響設計学科の学生のアジア度は他学科の学生のアジア度よりも若干低いように推測される。音響設計学科の学生は欧米の音楽を指向していると言えるかも知れない。

この程度の検討から結論らしきことを導くのは難しいが、最後に私見を述べたい。芸工大生 (そして多分日本人一般) のアジア度において一番の問題点は韓国の音楽と楽器への無関心、無知である。現在日本にある文物の多くは中国大陸から朝鮮半島を経由して輸入されたものである。したがって、韓国の人々が中国の伝統的な音楽や楽器について知っていて、日本の伝統的な音楽や楽器についてはあまり知らないのは文物

の流れからして不自然ではない。しかし、日本人が韓国の伝統的な音楽や楽器について無知だということは不自然だといわざるを得ない。その原因は歴史的、民族的な問題が錯綜して形成されたのであり、それを究明する意図は本稿にはないが、このような不理解の現状を改善するための方策については考察する必要がある。

幸運なことに、筆者はこの私見を書く直前の2003年10月29日に金利恵 (Kim Ri-Hae) さんの韓舞「白い道成寺」の福岡公演を見た(太宰府市中央公民館)。この韓舞(からまい)は金さんが伝統的な韓国舞踊を基にして、それに自身の新しい創作を加えて名付けた舞である。白色を基調にした衣装で鐘をめぐる道成寺説話のストーリーを舞っていく舞台は見事であったが、それとともに感動したのは、その舞台をサポートした日本の能囃子と韓国の国楽との合奏であった。日本と韓国は「近くて遠い国」であり、音楽的には異質な、かなり遠い国である。そのような音楽が掛け合わされ、調和していく変化は非常に創造的な時間であった。

日韓の伝統音楽を結びつけていたのはチャンゴ(韓国の伝統打楽器)や小鼓の名手達の演奏であることに間違いはないが、舞を中心に置いたクリエイティブな構成が大きく貢献していたと言えよう。このような成功例を目前にすると、他にもクリエイティブなやり方は色々あって、工夫次第で、日韓の音楽は共通の土俵をもちうるものと考えられる。そのような「共通の土俵」を実感することによって、学生も一般市民もアジアの中の韓国と日本を理解できるようになる。

謝辞

本稿をまとめるに当たって、データ整理の手伝いを熱心にやってくれた九州芸術工科大学芸術工学専攻博士前期課程1年生の坂本優美子さんに感謝します。また、このような原稿は学会誌には向かないと思われ、本学の「芸術工学研究」に掲載することを勧めていただいた編集委員(当時)の音響設計学科矢向正人助教授、環境設計学科近藤加代子助教授にお礼申し上げます。

最後に、本報告の読者に一つお願いがあります。筆者は今後も同様なデータを蓄積したいと考えています。そのため、本報告、特に表1を学生に見せないようにご配慮いただければ幸いです。

参考文献

- [1] 吉川茂, 音響設計学入門—音・音楽・テクノロジー (九州芸術工科大学音響設計学科編, 九州大学出版会, 2000年) 第5章「楽器の楽理・物理・心理」
- [2] 吉川茂, 「物理システムとしての楽器の研究とその必要性」日本音響学会講演論文集, 673-574 (2001年3月)
- [3] 吉川茂, 「楽器—音と音楽と人間を結びつけるもの」音楽音響研究会資料 MA2001-15, Vol. 20, 1-5 (2001)
- [4] 渡辺裕, 聴衆の誕生—ポスト・モダン時代の音楽文化 (春秋社, 1989年)
- [5] 鹿島亨, 絵と音楽の対話—名画にみる楽器 (芸術現代社, 1977年)
- [6] 上尾信也, 歴史としての音—ヨーロッパ中近世の音のコスモロジー (柏書房, 1993年)
- [7] 国立歴史民俗博物館編, 日本楽器の源流—コト・フエ・ツツミ・銅鐸 (第一書房, 1995)
- [8] 植村幸生, 韓国音楽探検 (音楽之友社, 1998年)
- [9] 櫻井哲男, アジア音楽の世界 (世界思想社, 1997)
- [10] 吉川茂, 「チェンバロからピアノへ—鍵盤楽器の進化」日本音響学会誌 Vol. 57, 704-711 (2001)
- [11] 柴田南雄, 声のイメージ (岩波書店, 1990)